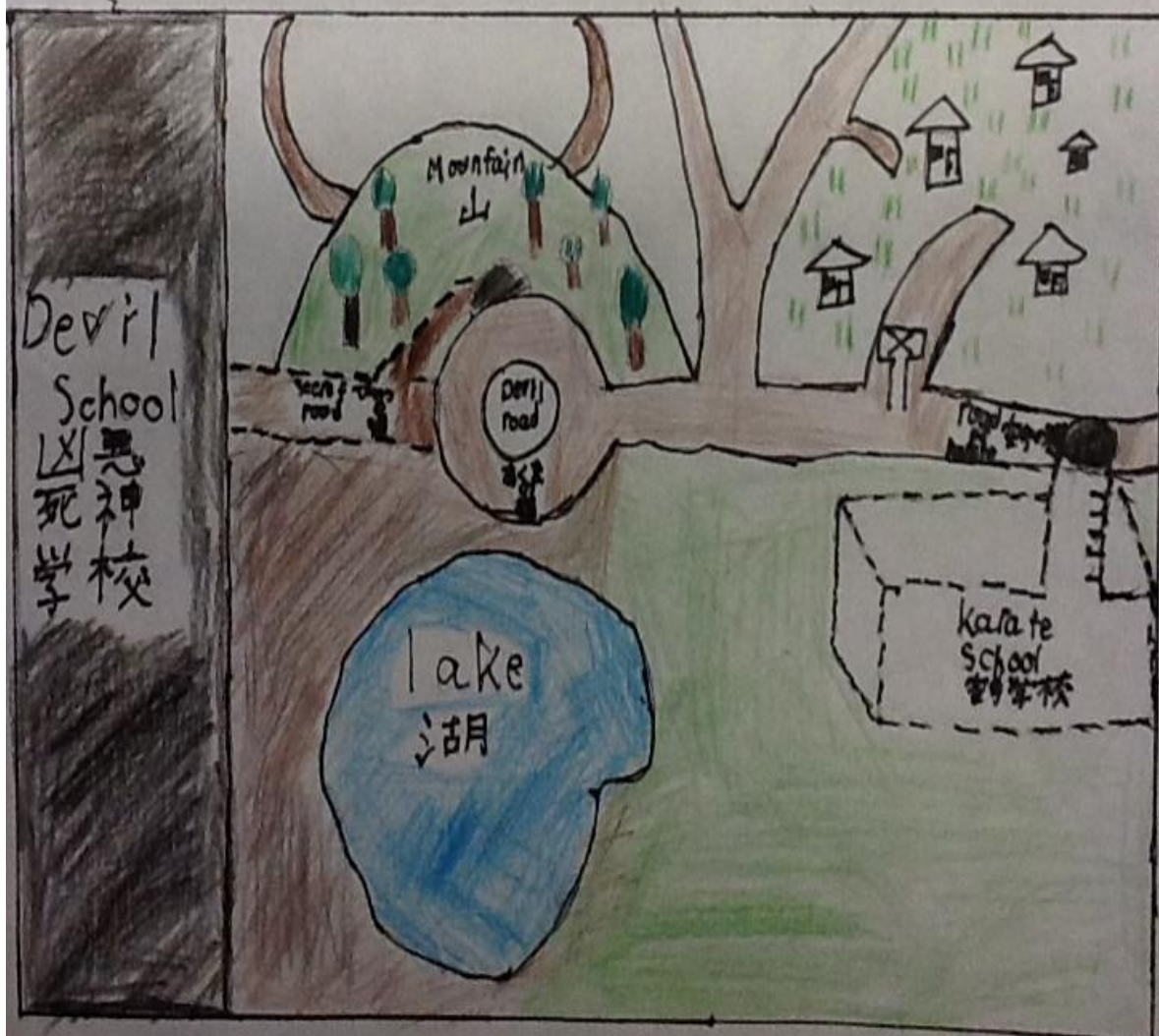


空手学校の忍術使い  
The Adventure of Black Belt Boy

高山 隼人  
Hayato Takayama



空手学校の忍術使い

The Adventure of Black Belt Boy

高山 隼人

Hayato Takayama

昔々あるところに、まあまあ強い黒帯たちが、地下深くにある空手学校に住んでいました。その学校では、刀・やり・ヌンチャク・手裏剣・針などの武器を生徒に一人ひとつずつ渡し、特訓するのです。さー、お話の始まり始まり…。

Once upon a time, somewhere deep under the ground, there lived not very strong black belt students in Karate School.

In that school, students diligently practice their own weapons chosen from katanas (Japanese traditional sword), spears, nunchakus, needles, or etc.

Now the story begins...

ドタドタドタドッシーンガラガラガラ！！教室ですごい音がしました。

「なんだー？またポンすけか？」先生がどなります。

「は～い、僕です。ハットリ先生の大事なものをまた壊してすいまちえ～ん。」

「おいおいまたかよ。壊しすぎだぞ。だいたい、『ちえ～ん』ってなんだよ？」

「え～と僕にしては本気に謝っている。という言う意味です。」

「はいはい分かったよ。」と、あきれ顔のハットリ先生。

え？ポンすけってだれだっけ？それは、ここ空手学校一のいたずら生徒のことです。全くのいたずら小僧なので、今もまた教室の中でレースの練習に見せかけてあばれまわって、ハットリ先生の大事な置物をこわしたのです。

「だいたいな、お前はおれの大事な物をこわしすぎなんだよ…。あれ？ポンすけはどこだ？ポンすけーどこだーかくれてもむだだぞ～。」

ポンすけが急に消えたので、ハットリ先生はあわてました。

みなさんも、先生と同じく、ポンすけはどこかにかくれたと思うでしょう？でもポンすけはかくれてなんていません。どこに行ったと思いますか？それは『凶悪死神学校』の死神教師がつれさらっていったのです。なぜかって？それは、ポンすけが生意気なやつだからです。生意気なやつは必ずそこに行かなければなりません。そして何年行くかは夢の中で決めるのです。

**CLANK! CLATTER!! CLINKETY-CLANK!!!**

A loud noise rang in the classroom.

“WHAT’S HAPPENING? PONSUKE AGAIN?” shouted a teacher.

“Yes, I did it, Mr. Hattori. I’m sorry I broke your precious thing again,” said a student called Ponsuke.

“Hey! You’ve been breaking too much! You should be more careful, Ponsuke,” said Mr. Hattori.

“I’m always very careful,” replied Ponsuke, who is a very lovely, naughty boy at Karate School. He always does all the naughty things – just now, he’s broken Mr. Hattori’s very precious pot.

Mr. Hattori, of course, began to scold him. “You always make this mess. You must be more careful, otherwise… Hey, are you listening? Where are you?”

Turning his head, Mr. Hattori found Ponsuke already disappeared.

次の日、ハットリ先生が一人の生徒に言いました。

「おい、鳥つかい。ポンすけがどこにいるか知ってるか？昨日の昼、いたずらしたからしかってた最中に急にいなくなったんだ。お前の部屋に隠れていないか？」

「それは秘密です。もしかするとおわさの凶悪死神学校の教師に連れ去られたんじゃないじゃありませんか？それに、僕が鳥を飼っているからって鳥つかいと呼ぶのもやめてください。」と、鳥つかいとよばれた生徒が答えました。この子がこのお話の主人公で、本当の名前はいくさです。

「やっぱり連れてかれたかー。で、そのなんとかなんとか学校ってどこにあるんだ？」

「それは秘密です。この鳥で探してみましよう。おい鳥！」といくさが一声さけぶと、クェクェーと鳴き声がし、バサバサと一羽の鳥がいくさの肩にとまりました。

「おい鳥、ポンすけを探しに行ってくれ。見つけたら道案内をするんだ。」

「クェクェー。」と鳥が話しかけると、「よし分かった。」と、いくさが答えます。

「おい鳥つかい、お前、鳥としゃべれるのか？」

「はい。実は、僕は生まれる前にその凶悪死神学校に行って、そこで覚えました。」

「へー、いいな。おれも鳥としゃべりたいな。おっ、いくさの鳥が死神学校に、い・く・さ。」

「今度はだじゃれですか。あ、そうだ、思い出した。たしか、あるとても恐ろしいゆうれいやしきに行った者は、魔物にさらわれるといううわさを聞いたことはありませんか？だからポンすけみたいな強がり生意気なやつがさらわれたんだ…。」

バサバサバサバサと羽音を立てて鳥が飛び立ちました。

The next day Mr. Hattori talked to another student, “Hi, Bird Boy. Do you know where Ponsuke is? Yesterday he suddenly disappeared when I was scolding for breaking my precious thing again. Isn’t he hiding in your room?”

“That’s a secret, sir,” the student called Bird Boy replied. “He may have been kidnapped by a teacher from Worst Devil’s School, I would think. Also, could you please stop calling me Bird Boy just because I keep birds, sir? My name is Ikusa.”

*Ikusa is the hero of this story. He is not only a black belt in karate but also has many special abilities.*

“Oh boy, that’s too bad. So, where is that Worst Devil’s School?” said Mr. Hattori.

“That’s a secret, sir. Let’s make my bird look for him. Hey, Sasuke! Are you there?”

When Ikusa called his bird Sasuke, he showed up out of nowhere and stopped on Ikusa’s shoulder.

“Hey, Sasuke. Go and find Ponsuke. You should guide us there once you find him,”  
Ikusa commanded.

Sasuke flew up high with strong flutters.

バサバサバサバサ。

「あっ、帰ってきた。どうだった？見つかったか？」と、いくさがききます。

「クェークェークェー。」

「なになに、『ポンすけは凶悪死神学校に連れて行かれました』やっぱりか！」鳥の言葉を聞いて、こう言ったのはハットリ先生でした。

「ハットリ先生、鳥の言葉分かるんじゃないですか。」

「まあ、おれも子供のころ一週間ほど死神学校に行ったことがあるのを思い出した。お前はどれくらいいたんだ？」

「十年くらいですけど。」

「だからそんなにしゃべれるのか。」

その時、ヒラヒラと鳥が何かを一枚落としました。

「おっ、写真じゃないか。ん？何にも写ってないぞ。」とハットリ先生。

「たしかに何も写ってないですね、いや、ちょっと待ってください。これ、ハットリ先生には分かると思うんですが、いや、やっぱり一週間じゃ無理かな。」といくさが言うと、

「だから何が写ってるんだよ？」とハットリ先生。

「ここに写っているのは、透明人間です。」

「やっぱりな。何かすけてるやつが見えると思ったよ。ところでこの写真、どっから落ちてきた？おれはよく見てなかったぞ。」

この時、チクタクチクタク、クルッポー、クルッポーとハットリ先生の時計が鳴りました。

「あっ、十二時だ！お昼ごはんは何だろう？」と、いくさ。

「おい、あほ。今そんなこと考えてる場合か！しかもお前、おれの大事な時計を勝手に改造したな？」

「それは秘密です。いや、ごめんなさい。」

「まあいいや。また新しいのを作れよ。じゃ、明日にでもこの写真をたよりにポンすけを救出に行くか。」

「でも、たったの二人だけじゃ、なんか人数少ないですよ。じゃあ、僕の鳥を一羽連れて行きますか。」

そこに小鳥が一羽、とっとなとっとなとやってきて、

「あの一、僕も行っていいですかー？」

「ダメだ。お前はまだまだ修行が足りない。」そういくさが答えると、

「うわーん、うわーん。お父ちゃーん、この人たちやっつけっちゃってー。」と小鳥が大声でわめきました。すると、ドシン、ドシン、ドシンという足音とともに、

「だれじゃー、うちの子を泣かしたのはー！せいばいしてくれー！」と大きな声。

「ハットリ先生、こいつはいったいだれですか？」といくさがききますと、

「うん、こいつはこのわがまま小鳥の親鳥で、わがまま王と言われているほどのわがままらしい。」とハットリ先生が教えてくれました。

「は一、だったら追い出すしかないですねー。来い、サスケ！」こういくさがさけぶと、サスケとよばれた鳥がクルッポーバサバサと飛んできました。「おいサスケ、このわがまま王を学校から追い出してくれ。」

これを聞いたわがまま王は、「なにっ、なめるな！おれたちは…うわっ！」

クルルルポーとサスケがはげしくせめ立てます。

「うわー、こんな鳥ごときの攻撃で追い出されるとは…。」ぴゅー、キラーンと、わがまま王たちははるか遠くに飛んで行きました。

それを見た小鳥が、「あーっ、僕のお父ちゃん？だったらこの僕ちゃんがかたきを取ってやるー！かくごしろー！」と言っていくさにかかって来ました。

「サスケ、じゃ、こいつも。」といくさが言ったら、

「ちょっと待て鳥つかい。お前は弱いのか？」とハットリ先生が聞いてきたので、

「強いですよ。じゃ、僕がやります。」

いくさが答えるやいなや、ドッドッドドシーン、ガラガラガラと、大きな音とともに小鳥もふっ飛んでいきました。なんだかかわいそうな親子でしたね。

Sasuke came back soon.

“Here he comes. Have you found him?” asked Ikusa.

“Quway, quway,” said Sasuke.

“OK. You mean, ‘Ponsuke is at Worst Devil’s School.’ You were right, Bird Boy.” said Mr. Hattori.

“Mr. Hattori, I didn’t know you understand bird language. How did you learn it?” asked Ikusa in surprise.

“That’s a secret, boy,” said Mr. Hattori wickedly.

Sasuke gave a photo to Ikusa.

“What’s in it? Show it to me,” said Mr. Hattori. “Oh, it’s just totally blank. Could you see anything, Bird Boy?”

“Yes, sir. I can see something that you may not be able to see,” said Ikusa calmly.

“So, what can you see?” asked Mr. Hattori, frustrated by Ikusa’s calmness.

“I can see an invisible man,” said Ikusa.

“I knew it,” said Mr. Hattori, “OK. Now we’ve got the clue. Let’s set off to save Ponsuke tomorrow morning.”

“But only by two of us? Why don’t we take one of my birds?”



When Ikusa said so, a little bird came up, saying, "Well, may I go with you, sir?"

"Nope. You are too young," Ikusa rejected sharply.

The little bird burst into tears as soon as he heard it, crying, "OH DADDY, DADDY! THEY ARE SO MEAN TO ME! BEAT THEM!"

Then the father bird rushed in, shouting, "WHO IS SO MEAN TO MY LITTLE ONE? YOU'LL PAY FOR IT!"

"Mr. Hattori, who is this?" asked Ikusa.

"He is the father of this nasty little bird. He is called the king of selfish mind." Mr. Hattori explained.

"All right. Let's get rid of him. Come on, Sasuke! Go for it!"

"NOOOO...!" The father bird was kicked away immediately.

Seeing it, the little bird attacked in furiously, "I WILL avenge my father!"

"Go, Sasuke," said Ikusa calmly, but Mr. Hattori said, "Hey Bird Boy, can't you beat him?"

"No problem, sir. I'll do it."

As soon as he said, the little bird was kicked far away toward his father with a big bang.

What a poor child and father...

「ふう、これでいっけんらくちやくと。と言うか、もう夜の八時半ですよ。早く寝ないと。」  
といくさ。

「ああ、そうだな。」とハットリ先生は答えましたが、心の中ではこう思っていました。  
(ポンすけがさらわれてから何かがおかしい。鳥つかいは気付いていないのか?)

しかし、いくさも同じことを考えて眠れていませんでした。

「うーん、寝られないなー。よし、もう一回ためしてみるか。鳥が一羽、鳥が二羽、鳥が三羽…、あーもう！何で寝られないんだー。」

“What a waste of time. It’s 8:30 pm, time to sleep,” said Ikusa.

“Yes, it is,” replied Mr. Hattori, thinking something else in his mind, ‘Something has been wrong since Ponsuke was kidnapped – doesn’t Bird Boy notice it?’

Ikusa, in fact, couldn’t fall asleep, thinking the same thing as Mr. Hattori.

“Oh I just can’t sleep. Let’s try it again: one bird, two birds, three birds…”

そのころポンすけは、

「おっ、こんな所に麦茶発見！の一も一っと。ブー！だれだっ？わきの下こちょこちょしたの？こちょばい、こちょばいっ！」

そこは、凶悪死神学校の笑わせ教室めっちゃお笑い〜クラブのレベル1だったのです。そのクラブには、レベル1から10まであって、今ポンすけは一番簡単なレベルにいるのです。

それでもまあ、笑わせ教室に入った子は運がいいと思わないといけません。なぜって？そりゃ、ほかの教室では、小指で5メートルもある大岩を持ち上げないといけなかったり、1100トンもある鉄を10個持ち上げないといけなかったり、学校を丸ごと持ち上げないといけなかったりするからです。しかもそれを十二時間ずっと続けるとなるとなかなか大変でしょう。

Let's see how Ponsuke is doing.

He just found a cup on a table.

“It looks like nice tea. Don't mind if I try it... Oh, no! Who is tickling me? No, no! Stop it!”

He is in the classroom of Super-Comedy Class, Level 1 at Worst Devil's School. This class has 10 levels, and he is now at the beginners' class, where everybody is tickling each other.

But he must think himself lucky because other classes are much worse; students have to carry up a huge stone with the little finger alone, keeping it for 12 hours, for example.

おっといけない、話を空手学校のいくさたちに戻しましょう。

夜中の学校にひびく、「どーこーだー…。」という不気味な声。

その声を聞いたハットリ先生は、「もー、一体だれだ？寝られないじゃないか。あっ死神さまでしたか。って、だれやねん？」と寝ぼけて言いました。

翌朝先生は、「なー、鳥つかい。おれな、昨夜なんか変な事があったぞ。夢の中で死神が出てくる夢を見たんだ、っておい、聞いているのか？」といくさに言いました。

「聞いてません。そんなことより早くポンすけを助ける方法を考えないと…、ん？待てよ。先生、その話、最後までしてください。」

「だから言っただろ？えーっと、どうも、昨日の昼からなんか妙な物がこの学校にいる気がしてるんだよ。まあ、最初はあまり気にしてなかったんだけどな。そして、夜寝ようとしたときに、そう言えばみんなの空手テストの丸付けをするのを忘れてたことを思い出して教師部屋に行こうとしたらな、聞こえたんだよ。『どーこーだー』っていう不気味な声が。あれは絶対に死神のうめき声だと思って、とても教師部屋には行けなかったってわけ。あー、思い出ただけで恐ろしい、恐ろしい。」とブルブルふるえるハットリ先生。

「へー、そんなことがありましたか。で、やっぱりそれがポンすけの手がかりですか？」

「それは知らん。」

「で、ポンすけの救出にはいつ行きます？たしかハットリ先生は、今日の昼ごろ行くって言ってましたよね。もう午前 11 時ですよ。ていうか、まだ朝ごはんも食べてませんよ。」

「お前、まだだったのか？」

「まだですよ。だいたいハットリ先生、旅の準備はできているんですよ。」

「ああ、だいたいな。でもどうしてもあれが見つからないんだよなー。」

「あれとは何ですか。」

「えーっと、その、うーん、魔法の本と、先祖代々の刀。それが、なーい。お、ここにあった。で、鳥つかい君、キミはふつうの刀と先祖代々の刀、どっちがいいかね？」とハットリ先生がいくさにきくと、

「僕はどちらでもけっこうです」といくさは答えました。

「そうか。お前、まだ本物の刀を持ったこと無いからなー。ま、今回は特別に切れ味のいい先祖代々の刀を貸してやろう。本当に特別だぞ。」先生が重々しく言うと、

「どうも。」あっさりといくさは答えました。

Let's go back to our Karate School.

It's just midnight.

In the hallway, you can hear a husky voice saying, "Where ... are ... you ...?"

Hearing the voice, Mr. Hattori talked in his sleep, "Mmm...Who is speaking? ...Oh, are you... Mr. Devil?"

Next morning Mr. Hattori said to Ikusa, “Hey Bird Boy, something bizarre happened to me last night. This Devil came to me in the dream and said... Hey, are you listening to me?”

“I’m sure I’m not, sir,” said Ikusa, “I’ve been very busy considering the plan how to save Ponsuke... Well, hold on, could you tell me your story again, Mr. Hattori?”

“So, listen to me carefully. I’ve been feeling weird since Ponsuke disappeared yesterday. I tried not to care so much at first, but, last night, I surely heard this scary voice saying, ‘Where are you?’ – I was so scared that I couldn’t go to bathroom. Oh, horrible, horrible!” said Mr. Hattori shiveringly.

“Hum, do you think that voice has something to do with Ponsuke’s disappearance?” asked Ikusa.

“I don’t have any idea, of course,” said Mr. Hattori proudly.

“So, are you ready to go, Mr. Hattori?” asked Ikusa.

“Almost, but I can’t find a couple of things.”

“What things?”

“Well, a Magic Book and my hereditary Katana. Oh, I’ve found them here. Now, Mr. Bird Boy, which do you prefer, a normal katana or my hereditary Katana?” asked Mr. Hattori.

“I don’t care, sir.” Ikusa replied.

“Good. I know you can’t choose because you’ve never experienced an authentic katana. OK. I’ll lend you my treasure, hereditary Katana, only this once. This is very, very special, you know,” said Mr. Hattori with dignity.

“Thanks, sir,” said Ikusa casually.

こうして凶悪死神学校をめざしてポンすけ救出の旅に出かけたいくさとハットリ先生の二人ですが、空手学校を出てもまもなくのこと、ドドドドド、キキーッ！という大きな音とともに、「うわー、ぶつかるー！だれか止めてー！！」というさげび声が聞こえました。

「何だ、あいつ？」といくさ。

ドシーン！！

「おいお前！ハットリ先生のだいじな物をこわすんじゃないっ！」といくさがさげぶと、「だっておれ、忍法・風走りの術を使ってみたかったんだもん！ベーだ！お前できねえだろ？だいたい、おれは白帯様なんだよ！」とその生徒がいばって言い返しました。

「白帯でいばることないだろ。そもそもお前より僕のほうが強い。」

「じゃ、お前の忍法見せてみろ。」

「忍法・分身の術。」

「げ！すみませんでしたー！おれ、忍法・逃げるのじゅつー…。」と、その子はぴゅーっと逃げました。「あ、逃げた。」

「こらー鳥つかい、遊んでる場合か。」

「ああハットリ先生、失礼しました。ところでこれ見たことあります？魔界の貝です。さっき見つけて取ってきました。」

「何だ、もう見つけたのか。旅の途中でお前にやろうと思ってたんだが、まあいい。ところでお前は どうしてあまり魔力を使わないんだ？」

「それは秘密です。」

Ikusa and Mr. Hattori set out on their journey eventually.

Soon after they left school, they heard someone shouting, “Get away! Get away! I’m gonna run into you!” Then a boy bumped into Mr. Hattori.

“Watch out! Mr. Hattori doesn’t want to get his valuables broken any more,” said Ikusa.

“I just wanted to try my new ninja trick, *Mach Running*. I bet you can’t do this, can you? Oh, do you know who I am? I am Mr. White Belt!” said the student proudly.

“It’s no use to be proud of a white belt. I think I can do ninja tricks better than you,” said Ikusa.

“Show me your ninja trick, then,” the student demanded.

“Ninja trick, *Bunshin-no-Jutsu*.”

Suddenly, there appeared many Ikusas around the student!

“I’m terribly sorry, Mr. Black Belt! Please forgive my rudeness... Ninja trick, *Run*

*Away!*" The student ran away like a wind.

"Hey, Bird Boy. What are you doing? We have no time to play around," said Mr. Hattori.

"I apologize, sir. However, I found something rare. Do you know what this is?" asked Ikusa.

"Yes, I do. It's a Devil's Shell. I'm glad you already found it. I was thinking I'd give one to you if you didn't find it. By the way, I'm wondering why you don't use your magical power so much."

"That's a secret, sir," said Ikusa.

一方そのころポンすけは、見つけた飲み物をちょうど飲んだところでした。

「うわーっ、なんだこれ？麦茶じゃないぞ！うえーっ、ぺっぺっぺっ！めっちゃまずー！お笑いクラブ教室の飲み物は大体おいしいのに、ちきしょう！」

その液体の名前は、『変な水』といい、世界一まずくて、飲むと三日後に石になってしまうという恐ろしい水でした。しかもこの三日というのは、ここ凶悪死神学校ではたったの三時間でしかないのです。

さらに奇妙なことに、実はこの水を飲んで石になるのは飲んだ本人ではなく、飲んだ人が馬鹿にした人が石になってしまうのです。

さて、ポンすけ、一体だれを馬鹿にしたのでしょうか？その答えは、今は秘密です。

At that time, Ponsuke had just gulped down the 'tea' he found.

"Yuck! What a terrible taste! This is not a tea! What in the world is this drink?!" he cried.

To tell the truth, it was a horrible magic water named, 'Strange Juice', which transforms the person into a stone in just three hours!

Strangely, moreover, the person who becomes a stone is not the one who actually drinks the water, but the one who is teased by the drinker. Now, can you imagine who Ponsuke teased? – I'll keep the answer secret at this time.



そんなことがおこっているとは知らずに、いくさとハットリ先生は、凶悪死神学校まで約二万キロの旅に出て、今三時間ばかりたったところです

早くも退屈してハットリ先生が言います。

「あー、つまらん。おい鳥つかい、この道で本当にあってるんだろうな。」

「ええ、もちろんあってますよ。って、ハットリ先生、いったいどこにいるんですか？」

「ここだー。」

「ああそこですね。」

「こら、『ああそこですね』じゃないんだよ。なんかおれたち、さっきからおんなじところを行ったり来たりしてないか？」

それを聞いて、いくさはギクリとしました。

「おい、どうした鳥つかい。おれ何か悪いこと言ったか？」

「いえ、先生は何も悪いことは言っていません。でももう気付きましたか。実はここは、同じところを七周しないと凶悪死神学校に続く道が現れないんです。」

「でも、それならどうしてその学校の死神教師たちは簡単に学校にたどり着けるんだ？」

「それは、死神教師たちだけが知っている秘密の道があるからです。急いでここを抜けないと、死神教師につかまっちゃいますよ。」

「なんで？」

「それは秘密です。」

Ikusa and Mr. Hattori are on their way to Worst Devil's School. Mr. Hattori is already totally bored, saying to Ikusa, "It's so boring. Are we going the right way? It seems we've been walking around the same place for hours."

Hearing this, Ikusa got startled.

"Are you OK? Did I say something wrong?" asked Mr. Hattori.

"No," said Ikusa, "You didn't say anything wrong. I was surprised you realized that – yes, in fact, we've been walking around the same place for hours. We have to go around here for seven times to reach the path to Worst Devil's School, though."

"But, then, why can the devil teachers get to the school so easily?"

"There is a route only they know. We should hurry up; otherwise they will come to catch us."

"Why?"

"That's a secret, sir."

こちらは凶悪死神学校校長室。

「なに、鳥つかいとあの空手学校のハットリ先生がこの学校に向かっているだと？」と、世界最強最悪校長が言いました。世界最強最悪校長はとてもおそろしく、この学校の全ての生徒と死神教師たちからおそれられています。

「はい。たしかにそのようです。」と、部下の死神教師が答えます。

「そうか。鳥つかいはまあいいが、あのハットリ先生というやつはけしからん。何しろ魔法というものを全く理解していない。」

「あの道を通り抜けるためには魔法の力が必要です。」

「そうだ。ひとつやつらを試してやろう。」

「と言いますと？」

「分からんやつだな。やつらになにか魔法を試してみろということだ。」

「そういうことでしたか。しかしどのように？」

「うるさいやつだ。なにか方法を考えろ。例えばこの学校の死神教師どもに魔法を使わせるとか色々あるだろう。」

「は一い、分かりましたあ。」いかにもめんどくさそうにその死神教師が答えたのを聞き、

「おい！なんだそのめんどくさそうな返事は！言い直せ！」と世界最強最悪校長が激怒してさげびました。実はこの校長はものすごく返事にきびしいのです。万一めんどくさそうな返事を聞こうものなら、手きびしいおしおきを受けます。手きびしいおしおきとは何かって？例えば百科事典を一日で読むとか、泳いで世界一周するとかですよ。

もちろん、この死神教師もそんなおしおきは受けたくないの、いそいそと出て行きました。

Here, the headmaster of Worst Devil's School, Mr. World's Strongest Principal is talking with a devil teacher in the headmaster's office. Mr. World's Strongest Principal is, by the way, so scary that all the students and devil teachers in this school are afraid of him from the heart.

“Are you sure Bird Boy and Mr. Hattori are coming toward this school?” asked Mr. World's Strongest Principal.

“Yes, they are coming, sir,” replied the devil teacher.

“Hum, I'm OK with Bird Boy, but I don't like that Mr. Hattori – he doesn't understand anything about magic at all,” said Mr. World's Strongest Principal angrily.

“They need magic power to go through that path anyway, sir.”

“Let's give them a run for their money.”

“What do you mean, sir?”

“I mean give them some obstacles using magic.”

“I’m afraid I still don’t understand what exactly you’re demanding, sir.”

“You such an airhead! You should use your own brain. You can work with other devil teachers to use magic power on them, for example,” said Mr. World’s Strongest Principal irritably.

“All right, whatever,” replied the devil teacher lazily.

As soon as he heard this lazy reply, he shouted furiously, “WHAT’S THAT REPLY? YOU MUST RESTATE IT AGAIN!!”

To tell the truth, Mr. World’s Strongest Principal hates lazy replies. In case you give him a lazy reply, you will get a super severe punishment from him, such as reading all the volumes of encyclopedia within one day, or travel around all over the world by swimming.

Not wanting this punishment, the devil teacher, of course, tiptoed away from the room hastily.

そんな死神教師たちのおじやまをもものともせず旅を続けたいくさとハットリ先生は、ついに凶悪死神学校の校門までたどり着きました。

「おい鳥つかいよ。この門開けられるか？」

「それは秘密です。」

「どうやらパスワードが必要らしいな。お前知ってるか？」

「それは秘密です。」

「知らないんだろう？とにかく色々ためしてみるしかないな…。まず、何でもいいからめちゃくちゃ打ってみろ。」

「はい。あ、開きました。」

「おいすごいな。なんて打ったんだ？」

『何でもいいからめちゃくちゃ』って打ちました。」

「それでいい。じゃ、入ってみよう。」

しかし、門をくぐった瞬間、急に門が大きくなったのでハットリ先生はびっくり！

「おい、何か急に門が巨大化したぞ！」

「そうじゃなくて僕らの体がちぢんだんですよ。ま、いいじゃないですか。気にせず行きましょう。」

「そうだな。それにしてもこの学校の建物、へんてこな形してるなー。」

Dodging around devil teachers' obstacles with ease, Ikusa and Mr. Hattori reached the gate of Worst Devil's School at last.

“Here we come. Can you open this gate, Bird Boy?”

“That’s a secret, sir.”

“It seems we need a password – do you happen to know it?”

“That’s a secret, sir.”

“I’m pretty sure you don’t. Let’s try whatever you like.”

“OK. I’ll try whatever I like. ...Now, it’s open.”

“Incredible! What did you put in?” asked Mr. Hattori with astonishment.

“I put in ‘whatever-i-like’, sir,” replied Ikusa like nothing.

“How true. Let’s go in.”

As soon as they entered the gate, it suddenly grew high up into the sky.

“What happens now? The gate gets enormously tall!” Mr. Hattori cried with even more astonishment.

“It’s not that the gate became tall, but we became short. This is what happened. But it’s no matter. Let’s move on, sir,” said Ikusa like nothing. And they went on.

廊下をしばらく行くと、何か書いてある立て札を見つけました。

「おい鳥つかい。なんか書いてあるぞ。読んでみろ。」

「先生読んでくださいよ。」

「おれは字が読めない。」

「おどろきの教師ですね。じゃ、読みますよ。なにに、『凶悪死神学校ルールその一、人に会ったらこのバカやろうと言うこと。その二、絶対に人をほめないこと。その三、決して笑わないこと。』とありますね。」

「くだらないルールばかりだな。」

「このバカやろう！くだらないとはなんだ？」突然、何者かの大声が廊下に響き渡りました。

「ん？だれの声だ？」

「わっはっはー！おれは死神バイキン教師様だー！お前ら、ここから先は通さないぞ！」

ついにいくさとハットリ先生の前に死神教師が立ちはだかりました。そのおそろしい顔つきに、さすがのいくさもきんちょうした顔をしています。

「子ども、こいつらをやっつけろー！」と死神バイキン教師が命令すると、

「しーん。」だれも動きません。

「おい、お前ら、何やってんだ？！」

「あー、おもちゃで遊んだり、ねそべったりしてますー。めんどくさいから、ご自分でやってくださいねー。」

「何だとー？」と死神バイキン教師はもうれつに怒っています。

「おい鳥つかい、なんかあいつらもめてるぞ。このすきに刀でやっつけちゃえよ。」

「でもハットリ先生、あいつの腹見てくださいよ。すごい脂肪で刀が通らないくらい太ってますよ。確実にとうによ病ですね。」

「まあとにかく行ってみろ。」

「分かりました。うおりゃー！！」

いくさが大声を上げて刀をふりかざして死神バイキン教師に向かっていくと、なんと死神バイキン教師は、「きゃーっ」となさけない声を上げて逃げていきました。実は死神バイキン教師が強いのではなく部下が強かっただけなので、本人はめちゃめちゃ弱いのです。

「おどろきの弱さだったな。いや。おれの先祖代々の刀が強すぎたのかな。」

「そういうことにしときますか。」

They found a bulletin board in the hallway.

“Read it for me, Bird Boy,” said Mr. Hattori.

“Why don’t you read it yourself, sir?” replied Ikusa.

“I have NEVER learned how to read,” said Mr. Hattori proudly.

“You are an AMAZING teacher. All right, I’ll read it. ...Hum, It’s about the rules of this school.

Worst Devil’s School Rule No. 1: Our official greeting word is ‘Idiot.’

Worst Devil’s School Rule No. 2: You must never compliment others.

Worst Devil’s School Rule No. 3: You must never smile.

That’s all, sir,” said Ikusa.

“Full of silly words,” said Mr. Hattori sniffily.

“IDIOT! I HEAR WHAT YOU’RE SAYING!” A loud voice suddenly echoed in the hallway.

“Who is this?” said Mr. Hattori surprisedly.

“Ha ha ha! My name is Mr. Germ the Devil. You will never go beyond me!”

Now, finally, Ikusa and Mr. Hattori have to fight with a devil teacher face to face for the first time.

Seeing Mr. Germ the Devil’s frightening face, even Ikusa has a strained look on his face.

“My minions, go and beat them!” ordered Mr. Germ the Devil.

Silence.

No one took an action.

“Hey guys! Go and beat them!” he commanded again impatiently.

“We’re busy playing with toys or sleeping idly, sir. We don’t like this messy business anyway. Why don’t you do it yourself, sir?” replied the minions lazily.

“What the heck are you saying?!” he shouted furiously.

“Hey, Bird Boy. They are arguing for some reason. Go and knock him out with this Katana now. It’s our chance,” Mr. Hattori whispered to Ikusa.

“But look at his belly, Mr. Hattori. It’s full of fat. I don’t think Katana works on him. I’m pretty sure he is diabetic,” said Ikusa.

“I would say, ‘Go For Broke,’ boy,” said Mr. Hattori.

“Roger.” Ikusa ran for Mr. Germ the Devil with his Katana holding high, yelling out, “GRRRRRRRR!!”

No sooner did he saw this than Mr. Germ the Devil ran away with crying for help miserably. In fact, it was not him but his minions that always beat the enemies.

“Surprisingly weak. Or, my Katana was too strong,” said Mr. Hattori proudly.

“I guess both are true,” said Ikusa calmly.

さてこちらは校長室。

「何？死神バイキン教師が負けた？それも刀が怖くて逃げてきたと？だったら死神ガイコツ教師を行かせろ。」と、世界最強最悪校長がいらいらした声で命令しますと、

「了解。」と、死神ガイコツ教師と呼ばれた教師が、不気味な笑いを浮かべつつ返事をしました。

Here in the headmaster's office, Mr. World's Strongest Principal has just heard the bad news from a devil teacher.

“Say it again? Has Mr. Germ the Devil been defeated? Without any fighting? He ran away just because he was afraid of a Katana? No kidding! You must beat them, Mr. Skull the Devil!”

“Yes, sir,” replied the devil teacher, Mr. Skull the Devil, with a fearless smile on his face.



「あー、もっと骨のあるやつは出てこないのかねー？」と、ハットリ先生がのんびりした声で言ったとき、

「ホネホネホネホネホネホネー！！！！」という声とともに、空から死神ガイコツ教師が二人の前に着地しました。

「うわっ、何だ今度は？」

「私のことは死神ガイコツ教師と呼んでいただきたい。先ほどのバイキン野郎とは格がちがうのでご注意を。」

「おい鳥つかい、なんだか強そうなやつが出てきたぞ。魔法の本になんかいい術は書いてないのか？」

「そうですねー。」と言いながらいくさは本をペラペラとめくり、「これなんかどうですかね。見たことない魔法ですが。」と何かを見つけました。

「なんていう名前の魔法だ？」

「えーっと、『錬金術』って書いてありますね。どうも、物質を金に変えてしまう魔法のようです。」

「それ、やれ。」

「じゃあやってみますか。材料は、水・塩・鉄・糸…、こいつらをよく混ぜて、はい、錬金術水のできあがり。」

「よし、そいつをあのホネ野郎にかけてやれ。」とハットリ先生が言うと、

「それっ！」というかけ声とともに、いくさは錬金術の水を死神ガイコツ教師に頭からあびせました。

「うわっ、冷たいっ。何をするんですか？おや、おやおやおや。なんだか私の骨が美しい黄金色に変わってきましたよ。これはすばらしい。黄金の骨の一撃を食らえ！」

しかし死神ガイコツ教師のパンチは、いくさに当たると同時にぐにやりと曲がってしまいました。

「あれあれ一体どうしたことだ？体がぐにやぐにや曲がってしまったぞ。」

「金はとてもやわらかい金属なんですよ。ではさようなら。」といくさ。

「こいつも話にならんくらい弱かったな。」とハットリ先生。

二人は先に進みます。

Ikusa and Mr. Hattori heard a high-pitched voice coming from the sky when Mr. Hattori carelessly said, "What we need is an enemy with backbone."

"Bone! Bone! Bone! Bone!"

Mr. Skull the Devil landed before them.

“Whoa! What’s next?” cried Mr. Hattori.

“Please call me Mr. Skull the Devil, my guests. I shall say you’d better be more careful this time. I’m in a different class from Mr. Germ the Devil,” said Mr. Skull the Devil.

“Look at him, Bird Boy. He *really* has backbone. Can you find any useful magic in the Magic Book? Quick!” asked Mr. Hattori with haste.

“Well, let’s see...,” replied Ikusa, turning the pages slowly, “How about this? I’ve never seen this before, sir.”

“What’s the name of the magic?”

“It reads ‘Alchemy.’ It seems it can change things into gold.”

“Try it.”

“Roger. Hum... the ingredients are... water, salt, iron, thread, etc, etc. Mix them well. ...All right, here we’ve got Alchemy Water,” said Ikusa.

“Good. Pour it on him,” said Mr. Hattori.

Ikusa splashed the water on Mr. Skull the Devil while yelling bravely.

“Oops! Cold! Stop it! What have you done to me? Oh? Oh! My bones are getting to sparkle into golden color! So cool! Hey boy, taste my golden bone punch!”

His fist, however, got crooked limply when it hit Ikusa.

“What? Why my bones get limp? What happened to them?!” screamed Mr. Skull the Devil in panic.

“Gold is a very soft metal, Mr. Skull the Devil,” said Ikusa sarcastically.

“This guy is finished off, too,” said Mr. Hattori with a satisfied look.

They went on.

「それにしても一体、ポンすけはどこにいるんだ？おれもう疲れたぜ。」ハットリ先生がぐったりした声で言いますと、

「ではサスケに探してこさせましょう。こら鳥！ポンすけを見つけて来んかい！」

「ちょっと鳥つかいくん、いくらなんでも乱暴じゃないか？」ハットリ先生はびっくりして言いますが、

「これぐらいでちょうどいいんですよ。」と、いくさは平気なものです。

バサバサバサバサー。サスケはたちまち戻ってきて、二人を校長室まで案内しました。

「ほー、校長室ね。ここにポンすけも閉じ込められてるってわけか。」

「とりあえずノックしてみましょう。」

コンコンコン。すると、「だーれーだー……」と言うおそろしい声が部屋の中からはまりましたが、

「おじゃましますよ。」といくさは平気でドアを開けて入って行きました。

「ちょ、ちょっと待てよ。」と、ハットリ先生もついて入ります。

中には、いかにもおそろしい顔つきの世界最強最悪校長と、そのそばで鼻をほじっているポンすけがいました。

「おい、ポンすけ。鼻ほじりはそれくらいにして帰るぞ。」といくさがいいますと、世界最強最悪校長が怒った声で、

「ダメだ！つれて帰りたければわしと勝負しろ。」とどなりました。

「いいですよ。あなたの一番とくいな方法で勝負しましょう。」といくさが言うので、

「おいおいおい、そんなこと言っているのか？あいつはホントに本当に強そうだぞ。」とハットリ先生が心配そうに言いました。いくさは平気な顔をしています。

「ほー、ずいぶんと自信たっぷりだな。それでは、わしの一番とくいな、じゃんけん十番勝負でどうだ？！お前が一回でも負けたら、わしの勝ちだ。」

「そんなずるいルールがあるか！」とハットリ先生。しかしいくさは、

「それで行きましょう。」と平然と答えました。ハットリ先生とポンすけはもう真っ青な顔をしています。

「いいかー、十回のうち一回でもお前が負けたら、お前ら全員、この凶悪死神学校で百年間トイレ掃除をやってもらうからな！」と、世界最強最悪校長はもう勝ちほこった顔でめちゃくちゃな要求をしてきました。

「いいですよ。」

「うちのトイレはとてつもなく汚いぞ！」

「いいですよ。」

「それと、うーんと、わしの肩ももんでもらうぞ！」

「いいですよ。」

「おこづかいはやらんぞ！」

「何でもいいですから、さっさと始めましょう。」

「よーし。せーの、じゃんけんぽんっ！」と言って、世界最強最悪校長が出したのはグー、いくさが出したのはパーで、一回目はいくさの勝ちです。

「いよーっし！」ハットリ先生とポンすけが喜びの声を上げました。

「二回目行くぞ！せーの、じゃんけんぽんっ！」世界最強最悪校長はやはりグー、そしていくさはパーでした。

「ふうー」ほっとするハットリ先生とポンすけ。

そしてその後、十回目までなんと世界最強最悪校長はグーを出し続け、いくさはパーを出し続けて、すべていくさが勝ったのでした！

「やったー！！」ハットリ先生とポンすけは抱き合って喜びました。その横で、世界最強最悪校長はぼう然と突っ立っています。

「わし、何でグーしか出せないんだろうか…」

「それは、ポンすけが三時間前に飲んだ『変な水』ののろいが効いて、あなたの手が石になったからですよ。」と、いくさが説明しました。

「ポンすけ、良くやったー！」とハットリ先生がポンすけの頭をぐりぐりなでまわします。

「おっ、おれちゃんいいアイデアを思いついちゃった。」とポンすけ。

「なんだ？」といくさが聞くと、

「これからは、空手学校も凶悪死神学校も仲良くすることにしませんか？」とポンすけが言うと、

「気に入った！」とハットリ先生と世界最強最悪校長が同時にさげびました！

Mr. Hattori said with an exhausted voice, “Where in the world is Ponsuke? I’m so tired.”

“Maybe it’s time to make my bird, Sasuke, look for Ponsuke again. Hey, Sasuke! Go and find Ponsuke right away!”

“Wait, wait, Bird Boy. You should be much nicer to your bird,” said Mr. Hattori surprisedly.

“That’s fine, sir. He is capable,” said Ikusa with a straight face.

After his voyage, Sasuke came back quickly and took them to the headmaster’s office.

“Ponsuke seems to be captured in the worst place,” said Mr. Hattori.

“Let’s knock on the door, sir,” said Ikusa and he did it with no hesitation.

Knock-knock.

They heard a loud, frightening voice from inside. “WHO IS THERE?!”

Ikusa, however, opened the door calmly and entered inside, saying, "Don't mind my coming in."

"Don't leave me alone!" A frightened Mr. Hattori followed him in a rush.

Then, they saw Mr. World's Strongest Principal, who was glaring fiercely at them, and Ponsuke, who was picking his nose innocently beside him.

"Ponsuke, it's time to stop picking your nose. Let's go back," said Ikusa.

"NO WAY! You must defeat me if you want to get him back," shouted Mr. World's Strongest Principal.

"All right. I can fight with you in your favorite way," said Ikusa.

"Wait, wait, wait! Are you sane? He looks really, *really* strong!" said Mr. Hattori in an anxious voice. Ikusa, on the other hand, kept a straight face.

"Brave boy. Good. Then, how about this? This is my favorite. Ten Battles of Rock-Paper-Scissors. If you lose any single battle, I am the winner!" said Mr. World's Strongest Principal.

"Unfair! No way to accept it!" cried Mr. Hattori.

"I shall accept it," said Ikusa calmly.

"NO WAY!" cried Ponsuke and Mr. Hattori at once, their faces turning blue.

"OK, guys. If you lose any single battle out of ten, all of you must clean out the toilet for 100 years!" Mr. World's Strongest Principal made the crazy demand, with a triumphant look on his face.

"I'll accept it," said Ikusa calmly.

"Are you sure? Our toilets are incredibly dirty!" said Mr. World's Strongest Principal proudly.

"I don't care."

"And, uum, you must massage my shoulders."

"I'm willing to."

“I will not give you any allowance.”

“I don’t need that. I’ll accept any conditions you want. Let’s get started.”

“OK! The first battle. Rock, Paper, Scissors, SHOOT!”

Mr. World’s Strongest Principal shot a rock.

Ikusa shot a paper.

“Yees! He made it!” cried Ponsuke and Mr. Hattori joyfully.

“Next! Rock, Paper, Scissors, SHOOT!”

Mr. World’s Strongest Principal shot a rock again.

Ikusa shot a paper again.

“Pheeeewww...” Ponsuke and Mr. Hattori sighed.

From that moment, Mr. World’s Strongest Principal kept shooting rocks.

Ikusa kept shooting papers, and he won the battle!

“YEEEEEEAAAAAAHHHHHHHHH!!!!!!!!!!!!!!” Ponsuke and Mr. Hattori burst into tears, hugging each other.

Besides them, stood the stunned-looking Mr. World’s Strongest Principal, muttering, “Why, why did I shoot only rocks...?”

“That’s because your hands became stone by the curse of Strange Juice that Ponsuke happened to drink three hours ago. And, he, of course, was teasing you as usual when he drank it,” Ikusa explained very clearly.

“You are a true HERO, Ponsuke!” Mr. Hattori shouted while rubbing Ponsuke’s head roughly.

“DING-DONG! Mr. HERO Ponsuke has a WONDERFUL idea!!” shouted Ponsuke suddenly.

“What’s that?” asked Ikusa.

“KARATE SCHOOL AND WORST DEVIL’S SCHOOL WILL BE BEST FRIENDS FROM NOW ON!”

“IT’S A DEAL!!” yelled Mr. Hattori and Mr. World’s Strongest Principal at the same time!

世界最強最悪校長と握手を終えると、  
「おい、鳥つかいとポンすけ、さあ帰るぞ。」とハットリ先生が言い、  
「はい！」と二人は声を合わせて言ったのでした。

おしまい

After shaking hands with World's Strongest Principal, Mr. Hattori said, "Hey, Bird Boy and Ponsuke. Let's go home."

"YES, SIR!" They replied at once.

The End